

## 恋の歌をよむ

群馬県立女子大学名誉教授 北川和秀

### A. 一途な思い

- ① 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ（八・一五〇〇）  
大伴坂上郎女
- ② 信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ（一四・三四〇〇）信濃東歌
- ③ 一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも（六・一〇一四）  
橘文成
- ④ 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ（一〇・一八三三）  
作者不明
- ⑤ 磯城島の日本の国に二人ありとし思はば何か嘆かむ（一三・三二四九）作者不明
- ⑥ かくばかり恋ひむものそと知らませば遠くも見べくありけるものを  
（一一・二三七二）柿本人麻呂歌集

### B. 女性の名前

- ① 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます児 家告らせ 名  
告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われ  
こそ居れ われにこそは 告らめ 家をも名をも（一・一）雄略天皇
- ② 難波瀉潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね（九・一七二六）  
丹比真人
- ③ 漁する人を見ませ草枕旅行く人にわが名は告らじ（一七二七）海未通女
- ④ 隼人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告りつ妻と恃ませ（一一・二四九七）  
柿本人麻呂歌集
- ⑤ 隠沼の下ゆ恋ふれば為方を無み妹が名告りつ忌むべきものを（一一・二四四一）  
柿本人麻呂歌集

C・母

- ① たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに（一一・二五三七）  
作者不明
- ② 汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ（一四・三五一九）  
未勘国東歌
- ③ たらちねの母に障らばいたづらに汝もわれも事成るべしや（一一・二五一七）  
作者不明
- ④ たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年そ経ぬべき（一一・二五五七）  
作者不明
- ⑤ かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ（一一・二五七〇）  
作者不明

D・人の目・人の噂

- ① 暫くも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく（一一・二三九七）  
柿本人麻呂歌集
- ② 嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞きあへてあるかも（七・一三八三）  
作者不明
- ③ 心には燃えて思へどうつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも（一二・二九三二）  
作者不明
- ④ うつせみの人目繁けばぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ（一二・三一〇八）  
作者不明
- ⑤ あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つわれを（一二・三〇〇二）  
作者不明

E・通う男の気持ち

- ① 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ（一四・三三八七）  
下総東歌
- ② 妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬか其を因にせむ（一一・二六八五）  
作者不明
- ③ 思はぬに到らば妹が嬉しりと笑まむ眉引き思ほゆるかも（一一・二五四六）  
作者不明

## F. なかなか逢えない

- ① み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも（四・四九六）柿本人麻呂  
② 恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば（四・六六一）

大伴坂上郎女

- ③ 如何ならむ名を負ふ神に手向けせばわが思ふ妹を夢にだに見む（一一・二四一八）

柿本人麻呂歌集

## G. 来ない男

- ① 春雨に衣はいたく通らぬや七日し降らば七日来じとや（一〇・一九一七）作者不明  
② 陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（三・三九六）笠女郎  
③ 相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくごとし（四・六〇八）笠女郎  
④ 相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えず祈誓ひて寝れど（一一・二五八九）  
作者不明  
⑤ 来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを  
（四・五二七）大伴坂上郎女

## H. 誇張した表現

- ① 君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも（一一・二三八一）  
柿本人麻呂歌集  
② 八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守（四・五九六）笠女郎  
③ 一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ（四・七四二）大伴家持  
④ 朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに（一一・二三九四）  
柿本人麻呂歌集  
⑤ 外にゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを（四・七二六）  
大伴坂上郎女  
⑥ かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを  
（一一・二六九三）作者不明

## I. 人妻

- ① 験なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ児ゆゑに（一一・二五九九）  
作者不明
- ② 神樹にも手は触るとふをうつたへに人妻と言へば触れぬものかも（四・五一七）  
大伴安麻呂
- ③ 人妻と何か其をいはむ然らばか隣の衣を借りて着なはも（一四・三四七二）  
未勘国東歌

## J. 旅の別れ

- ① 梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて（一九・四二六三） 作者不明
- ② 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（一五・三五八〇）  
遣新羅使人の妻
- ③ 草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも（一二・三一八四） 作者不明
- ④ 蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きし所思はゆ（二〇・四三五七）  
上総防人
- ⑤ わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず（二〇・四三二二）  
遠江防人
- ⑥ 吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらわが妻かなしも（二〇・四三三三）  
駿河防人
- ⑦ 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む（二〇・四四二四）  
武蔵防人の妻
- ⑧ 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しき物思もせず（二〇・四四二五）  
昔年の防人の妻
- ⑨ 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも（一五・三七二四）  
狭野弟上娘子
- ⑩ 畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ（一五・三七三〇）  
中臣宅守
- ⑪ 帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて（一五・三七七二）  
狭野弟上娘子
- ⑫ わが背子が帰り来まさむ時の為命残さむ忘れたまふな（一五・三七七四）  
狭野弟上娘子

## K・死別

- ① 降る雪はあはにな降りそ吉隠よなばりの猪養みかひの岡の寒からまくに（二・二〇三）穂積皇子
- ② 悔しかもかく知らませばあをによし国内くぬちことごと見せましものを（五・七九七）  
山上憶良
- ③ 吾妹子が見し鞆とちもの浦のむろの木は常世とこよにあれど見し人そなき（三・四四六）  
大伴旅人
- ④ 福さきはひのいかなる人か黒髪くろかみの白くなるまで妹が声を聞く（七・一四一一）作者不明
- ⑤ 我が背子を何処いづく行かめとさき竹の背向そがひに寝しく今し悔しも（七・一四一二）  
作者不明

## L・夫婦愛

- ① つぎねふ 山背道やましろぢを 他夫ひとつまの 馬より行くに 己夫おのつまし 歩かちより行けば 見ることに  
哭ねのみし泣かゆ 其思そこふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持てる 真ま澄鏡そみががみに 蜻蛉領巾あきづひれ 負おひ並なめ持ちて 馬買まかひへわが背（一三・三三一四）作者不明
- ② 真澄鏡まそかがみ持てれどわれは験しるしなし君が歩行かちよりなづみ行く見れば（三三一六）同
- ③ 馬買まかひはば妹歩行かちならむよしゑやし石は履ふむとも吾は二人行かむ（三三一七）同
- ④ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落ふらまくは後のち（二・一〇三）天武天皇
- ⑤ わが岡の霏おかみに言ひて落ふらしめし雪の摧くだけし其処そこに散りけむ（一〇四）藤原五百重娘
- ⑥ わが背子と二人見ませば幾許いくばくかこの降る雪の嬉うれしからまし（八・一六五八）  
光明皇后
- ⑦ 君がため手力たぢから疲つかれ織りたる衣きぬぞ 春さらばいかなる色に摺すりてば好よけむ  
（七・一二八一）柿本人麻呂歌集
- ⑧ 紅くれなゐは移うつろふものそ椽つるばみの馴なれにし衣きぬになほ若わかかめやも（一八・四一〇九）  
大伴家持